

GIZAN-Hatano 民陶一徹

越後の民芸陶の先駆 庵地焼

旗野義山の手技

(はたのぎざん : 1915 - 1979)

て わ ざ

2011. 2.22 ~ 3.21

阿賀野市所蔵近現代美術品展



越後の陶里、阿賀野庵地（あんち）の旗野窯三代旗野義山は、郷土の伝統的な陶器を基本に、現代の人々の暮らしに役立つ素朴で健康的な美しい焼き物を産み出そうと刻苦、1960年代のはじめ、洗練された面取技法と「庵地黒」と呼ばれる漆黒釉の作品を創出し、越後の民窯「庵地焼」の名を全国に広めました。

本展では、幾多の試練にみまわれながらも「すべての作業を人間の手と足とで行うぬくもりのある焼き物をつくる」を信条に土と炎とに向き合い、研鑽を重ね続けた同氏の作品を展示します。

旗野義山（本名・旗野義夫）のプロフィール

1915年（大正4）新潟県北蒲原郡安田村（現・阿賀野市）大字保田、庵地の製陶業旗野窯の三代目として生まれ、父嘉一（嘉山）を手伝い製陶の技術を体得した。

旗野窯は創業者である先々代の直太郎の時代には甕、徳利、すり鉢、火鉢等もっぱら地場消費の日用雑器を焼いていたが、先代嘉一が継ぐ頃になると京都清水焼の六兵衛（四代）などが滞在して秀作を残し、昭和前期には宮之原謙、佐々木象堂らも度々訪れ作陶の指向性に多大な影響を与えた。

太平洋戦争中召集され、シベリア抑留を経て1947年（昭和22）に復員。近隣の製陶窯が労働力不足と燃料材の徴用伐採によって休業、閉窯に追い込まれる中、唯一旗野窯は嘉一によって命脈を保ち、義夫の帰還を待った。

1951年（昭和26）から56年（昭和31）県展で連続6回入選を果たし、この頃から義山の号を用いるようになる。当時、親交のあった佐々木象堂に触発され日用雑器のほか多様な美術工芸品を模索、美術陶芸家として身を立てるべきか逡巡する。

1960年（昭和35）、嘉山が没すると、美術作品の製作を封印、父の遺志を継ぎ日用品づくりに専念することを決意。1961年（昭和36）、先代から継いだ九連房の登り窯が第二室戸台風で全壊、衝撃を受ける。翌年（昭和37）春、再起をかけた新築の七連房の窯で民芸調の漆黒色陶器や面取り茶器等を創出、注目を浴びる。これを機に通称名の保田焼を「庵地焼」の呼称に改め、以来、用に忠実な民芸陶器づくりを一徹に追い求めた。

各展での受賞歴多数。特に日本民芸協団全国民芸公募展での受賞常連者として知られているが、1965年（昭和40）の金賞。同1975年（昭和50）の最優秀賞は義山独創の「あじわいのある黒釉」「庵地黒」と洗練された面取技法が高い評価を受けてのものであった。

1979年（昭和54）3月、肺ガンのため後継次代を託した娘らに看取られて自宅で没した（63歳）



阿賀野市立 吉田東伍記念博物館



休館日：月曜日休館 祝日は開館、翌日休館 開館時間：9時30分～17時 入館は16時30分まで
入館料：一般300円（250円）小・中150円（100円）期間中は通常料金＝常設展示もご覧いただけます。（）は20名以上の団体料金
〒959-2221 新潟県阿賀野市保田1725 1 0250 68 1200 FAX. 0250 68 5016
http://www.city.agano.niigata.jp/togo_museum E-mail : y.togo@oregano.ocn.ne.jp